ダイスを振ってクロスオーバーの転移主人公を決めた。

ジムービムー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダイスを振って設定を作ったオリ主を作品から別作品にクロス転移させてみた。

ただそれだけです。

クロス作品：ファイブスター物語×ゼロの使い魔

目　次

ＦＳＳ簡易設定説明――――1
オリ主設定――――5
０．プロローグ――――10
１．召喚するは――――18
２．使い魔とするなら――――24
５００．語られるは――――①――31

ＦＳＳ簡易設定説明

・ファイブスター物語（以下ＦＳＳ）

永野護先生の描かれている漫画。

４つの恒星で構成されているジョーカー太陽星団を舞台としたサイエンスファンタジー。

極めて発達した文明が緩やかに衰退している時代を描いた作品。

ＦＳＳ内に登場する人類はみな３００歳以上生きる超長寿となっており、場面が変わると１０年２０年立っていたなんて事がよくある。

また設定がコロコロ変わることでも有名で、特に２０１３年に休載から復帰した際の設定変更は、ロボットの設定や騎士の設定など、基礎部分以外はすべてが変わっていたと言っていい。

なのでもしこの小説を読んでＦＳＳに興味を持ち、単行本を買おうと思った方は注意された方がいい。

具体的には１２巻までが旧設定、１３巻から新設定となっております。

・ゴティックメード（以下ＧＴＭ）

ＦＳＳ内に登場するロボットの総称。
旧設定は【モーターヘッド（ＭＨ）】。
騎士とファティマが乗り込んで戦う。
基本的な姿は人間の骨を肉付けせず、フレームと装甲を取り付けた感じ。
そして手が異様にデカイのも特徴。
詳しく姿が知りたい場合は各自で調べて欲しい。

・騎士
ウォーキャスターやヘッドライナーと呼ばれることもある。
ＦＳＳ作中時間より昔に人工的に作られた戦闘人種がご先祖様。
個人差はあるが、騎士は超人と言っていい能力を持っている。
具体的に書くと時速１８０㎞で走り続けたり、衝撃波を放ったり、戦車を素手で破壊したり、レーザーを見てかわしたりできる。
なので騎士となると一般人に危害を加えたりすると即死刑になったり、前述のＧＴＭに乗って戦争に強制参加させられる制約が課せられる。
ＦＳＳ最大の花形。

・ファティマ
人工的に作られた生命体。

ＧＴＭを制御し、騎士を助けるだけに作られた戦闘兵器。
見た目麗しい女性の姿をしているが、生殖機能は無い。
また上記の騎士以上に重く厳しい制約が産まれた瞬間から課せられており、ほとんど自由はない。
唯一の自由は自身で主となる騎士を選べることだけ。
人類のエゴで作られ、騎士を補佐し、死ぬまで戦うことが義務づけられた兵器。

・ガット・ブロウ

騎士とＧＴＭの扱う剣の総称。
物理的な刃はないが、電磁波の刃を纏わせることで対象を焼き切ることができる。
また電磁波を発射する機能も持つ遠近両用の兵器。
とても重量は１０ｋｇととても重いため、騎士やファティマ以外には扱えない、
（ちなみに日本刀で約１ｋｇ、ツーハンデットソードで３ｋｇ）
旧設定ではスパッド（光剣）・スパイド（実剣）となり、スパッドはライトセイバー、スパイドは刀の形状をしている。

・バスター砲

ＦＳＳにおける最強の大量破壊兵器、撃つと海でも山でも吹き飛ばしてしまう。
バスター砲は３種類あり、威力は共通しているが構造の違いで呼び方が変わる。

砲身とエネルギー元が一体のバスターロック（バスター砲専用のエネルギー元が一つにまとまっている）

砲身とエネルギー元が個別のバスターファウスト（バスター砲専用のエネルギー元が別れている）

そして砲身のみでエネルギー元を別で用意するバスターランチャー（バスター砲専用でなくてもエネルギー元があれば撃てる）

主にＦＳＳで登場するのはバスターランチャー。

星団法という全世界で適応されている法律で戦争での使用が全面禁止になっている兵器。

ＦＳＳの戦争は土地の奪い合いが基本なので、その土地を破壊するバスター砲は土地の価値を下げてしまう。

そして戦争で使用すると他の国家から孤立する。

一応小惑星の破壊や土地の開拓で使用がされているが、戦争で使った場合悪い意味で歴史に残る。

オリ主設定

・名前：リリーマ・フォン・トラス（旧名：ラトーリス・黒華鼎（コーカイテ））
・性別：女性
・性格アライメント（３ｄ　３で理性的　２で平均的　１で感情的　一発判定）
「３」
【理性的　物事を冷静に見ており感情的になることがない。】
・思想アライメント（３ｄ×２　３で善／秩序　２で中庸／中立　１で悪／混沌　一発判定）
「１／１」
【悪／混沌　目的の為なら社会のモラルを軽視し、悪行を悪行と思わない。】
・産まれ（１００ｄ　１００で王族　５０で騎士の血筋　１で平民
クリティカルでシステム・カリギュラ）
「１：１４　２：９８　３：６０」３ｄ：２
【９８　王族】
・どの王家の血筋か（１００ｄ　１００でコーラス　５０でクバルカン

１でＡ．Ｋ．Ｄ．　クリティカルでフィルモア）

「１：６　２：２３　３：１」３ｄ：判定不要

【Ａ．Ｋ．Ｄ．】

・騎士としての実力（１００ｄ　最も高い数字を選択　１００で最高クラス　５０で一般騎士

１で最低クラス　クリティカルで超帝国騎士）

「１：１３　２：２６　３：９４」

【９４　最高位の騎士】

・バイター能力の有無（２ｄ　１であり　２でなし）

「１：２　２：１　３：１」３ｄ：３

【バイター能力あり】

・ＧＴＭの知識量（１００ｄ　１００でスライダークラス　５０で技術者

１で素人　クリティカルでガーランドクラス）

「１：６２　２：２２　３：７７」３ｄ２１

【２２≪クリティカル≫　ガーランドクラス】

・ファティマの知識量（１００ｄ　１００でスライダークラス　５０で技術者

１で素人　クリティカルでガーランドクラス）

「１：３４　２：２６　３：１６」３ｄ：１

【３４　技術者レベルの知識量】

・ファティマ名：オルトリーベル

・ファティマの性能（１００ｄ　１００でマイト制作　５０でマイト監修工場製　１で工場製）

「１：０９　２：３１　３：８１」３ｄ：３

【８１　マイト制】

・制作マイト（８ｄ　１．アーカス・マーキュリー　２．ギェーム・アイアン　３．エーロッテン・ニトロゲン　４．サリタ・アス・ジンク　５．アルミオン・エイボス　６．カルス・スパンコール　７．ムーン・カッパー　８．ガイガー・グラファイト）

「１：７　２：３　３：２」３ｄ：３

【ギェーム・アイアン制作ファティマ】

・詳細な性能（４ｄ　パワーゲージのＣ　Ｂ２　Ｂ１　Ａ＝１　２　３　４の間で採用　一発判定）

「戦闘能力：４　ＧＴＭ制御：４　演算性能：１　肉体耐久：４　精神安定：２」

【戦闘能力：A　GTM制御：A　演算性能：C　肉体耐久：A　精神安定：B2】

・転移時の立場（100d　100でA．K．D関係者　50で小国の王
　1で騎士団所属　クリティカルでカリギュラ関係者）

「1：18　2：91　3：79」3d：1

【18　騎士団所属】

・所属国家（100d　100でAP騎士団　50でフィルモア帝国
　1でメヨーヨ朝廷　クリティカルでA．K．D）

「1：27　2：5　3：20」3d：1

【27　フィルモア帝国】

・所属騎士団（100d　100でカンプ・ノイエシルチス赤青黒　50で近衛騎士団
　1で教導騎士団　クリティカルで双頭竜騎士団）

「1：91　2：93　3：24」3d：1

【91　カンプ・ノイエシルチス所属】

・ノイエシルチスの所属先（3d　1で赤　2で青　3で黒　一発判定）

「3」

【黒　ノイエ・シュバルツ所属】
・ＦＳＳ側から召喚された時期（１００ｄ　１００でカラミティ星崩壊直前　５０で魔道大戦時　１でコーラスハグーダ戦争時）
「１：５０　２：３１　３：８１」３ｄ：１
【５０　魔道大戦中】
・ゼロ側へ召喚してきた人物（１００ｄ　１００でルイズ召喚　５０でジョゼフ１世召喚　１でゲルマニア皇族召喚　クリティカルでブリミル召喚）
「１：２１　２：２　３：７３」３ｄ：１
【２１】ルイズ召喚

0．プロローグ

振り返れば、私の歩んできた人生は幸運にあふれていたのだろう。

だが、その幸運が私に幸せを運んでくることはなかったとも思う。

アマテラス・キング(A.K.)ダム・ディメスン(D.)を統べるアマテラス家に連なる分家、黒華鼎(コーカイテ)に産まれた私は、優れた騎士の力とバイターの力を併せ持っていた。

コーカイテに忠を誓う者たちは、これで一族の将来は安泰だと、そうはやし立てていた。

しかし、父と母は私を嫌った。

２０年先に産まれていた兄がいたからだ。

長男もまた騎士の力を有してはいたが私ほどの力ではなく、だけども父も母も兄に多くの愛を注いでいた。

赤子の時分から全ての世話は使用人に行わせ、ただの一度も私を抱きしめることはなかったという。

「黒華鼎を継ぐのは長男でなくてはならない。」

言葉には出さなかったが、父と母は態度でもって私にそう伝えた。

私を育てた使用人は、憐れみの色を魅せる目で私を見ていた。
しかしそこに愛は無かった。
私も使用人より親の愛が欲しかった。
幼い私は、こちらを見ようともしない親の気を引くために騎士の修行と勉学に励んだ。
大人の騎士に教えを乞い、毎日剣を振るい、多くの書物を読み、知識を貯めこんだ。
だけども、そんな努力の成果を見せる機会すら、私から遠く離れて暮らす両親は作らなかった。
私はそれを自分の努力が足りていないのだと錯覚し、よりいっそう勉学に励んだ。
自分が望めばどのような書物も師も用意して貰ったこともあって、その錯覚は中々解けなかった。
その頃の自分は確かに愚かだったが、その努力が今の自分を構成していると思えば無意味ではなかった。
けれども、１０年、２０年と時がたつにつれ私の錯覚は徐々に解けていった。
３０年もたてば、私は親から必要とされていない、望まれない子だったのだと理解した。
理解したが、諦められなかった。

一度でいい、ほめて欲しい。
よく今まで頑張ったと、その一言があればよかったのだ。
結論から言えば、その思いは伝わることはなかった…。
自身が望まれない子だと理解してもなお、私は修行と勉学に打ち込んだ。
私にはそうすることしかできなかった。
兄はこの３０年の間、学校へ通い、社交界へお披露目をし、多くの友を得たという。
私には同年代で親しい友などできなかった。
両親が私の出生をＡ．Ｋ．Ｄ．に隠していた事を知ったのは、サリオン王子の反乱に巻き込まれた両親と兄が死んだ時だった。
世話役の使用人が隠れてその話をしていたのを、偶然聞いてしまった私は悲しみと絶望に襲われ、そして一つの事実に気が付いた。
私は、親の顔を、知らない。
名は知っている。どういった家系かも知っている。
しかしどんな顔をして、どんな物を食べて、どんな暮らしを送っていたのか。
写真の１枚すら送ってこなかった両親の事を、その両親の愛を受けて育った兄の事を、私は何一つとして知らなかった。
私は涙を流しながら笑った。

狂ったようにゲラゲラと笑った。
両親の事も、兄の事も、何一つ知らずに盲目的に信じた自分が溜まらなく可笑しかった。
私は屋敷にあった紙幣と宝石を全て持って外へ出た。
親の事も家系の事も、全てがもはやどうでもよかった。
こんな屋敷を出て、どこかへ消えてしまいたかった。
幸運だったのは偽名を使って、他国の騎士に師事しにいったことが何度もあったことだ。
その際に使っていたパスポートも期限が切れておらず、一人で行くこともあったため他の星に行くことに抵抗はなかった。
また出生の報告がされてなかったこともあって、私がA．K．D．の王族であることは屋敷の使用人しか知らなかった。
例え使用人が私のことを上に報告しようが、本当に黒華鼎（コーカイテ）に娘がいたかの証拠も早々見つからないだろう。
私は、【ラトーリス・　黒華鼎（コーカイテ）】という名はこうして闇に葬られた。
そして私はパスポートに書かれていた名前、【リリーマ・フォン・トラス】となった。
こうして他国へ渡り、星から星へ、街から街へ流離う旅人となった。

幼いとはいっても十分な修行を積んだ騎士である。
私の身柄を狙ってきたゴロツキでは捕まえられず、逆に打倒して金を奪っては路銀のたしにしていた。
とはいえ、あまり派手に動くと懸賞金をかけられて狙われかねない。
襲われてもほとんどの場合は逃げに徹していた。
逃げる理由は他にもあった。
裏社会で動く腕利きの騎士だったり、バイターだったりと、治安の悪いところに行くとそういった自分では叶わない輩に襲われることも多かったからだ。
そういった旅を続けていたある時、安全だと思われていた宿を強襲され囚われたことがあった。
惑星カラミティ・ゴーダースの荒野にある街での出来事だった。
宿の主人が裏社会に通じており、一人で止まりに来る客を仲間の騎士と共に襲い、身ぐるみを剥いでは荒野においてけぼりにするあくどい商売をしていたのだ。
私も同じ理由で狙われ、奴隷として売る目的で捕まえられたのだった。
私は大きく抵抗しなかった。
元々目的もなく、ただ流離い――今もそうではあるが――死に場所を探していたのだ。

奴隷にされ、滅茶苦茶にされても別によかった。
しかしここでもまた運が巡ってきた。
以前身ぐるみを剥いだ客がフィルモア帝国の政府関係者で、運よく生きて帰った彼が警察へ宿の情報を流したのだ。
結果、私は身柄を売られる前に派遣された騎士警察官が強制捜査で踏み込み、主人と仲間の騎士は逮捕された。
私は無事に解放されたが、身寄りがいない子供の騎士ということでフィルモア帝国が保護を申し出てきたのだ。
いや、保護というより、確保と言ったほうがよかった。
フィルモア帝国にも3回ほど修行しに行ったこともあり、私のことを覚えている騎士がいたのだ。
私はその騎士の養子に入り、フィルモア帝国へ身を寄せることになった。
フィルモアでの生活は悪くはなかった。
親となった騎士はあくまで騎士の力を欲していたということもあり、あくまで保護者として接し、親として接することはなかった。
私はそういった関係になって感謝した。
親として接されるのが怖かったからだ。

学校にも通った。
たまに遊ぶ程度の友を多く得た。
心を許す親友を作ることはなかった。
やがて成長した私は正式に騎士となり、フィルモア帝国の誇るカンプ・ノイエシルチスの黒へ入ることが許された。
ギエーム・アイアン博士の作ったファティマ【オルトリーベル】を娶った時は私にお似合いだと思った。
ＧＴＭ制御はぴか一だが、演算能力の幅は狭い。
単独行動に向いており、集団戦闘には向かないその能力は、今まで一人で生きてきた私そのものだった。
ノイエ・シュバルツでの日々は良かった。
周りの全員が騎士であり、ノイエ・シルチスに選ばれる実力者ぞろいだったこともあり、修練にもより熱が入った。
任務も確実にこなし、ノイエ・シュバルツでも有数の実力者と見られるようになった。
ＧＴＭガーランドの資格は取得しなかったが、幼少期に蓄えた知識を生かして整備にもよく参加した。
おかげで整備員からの覚えもよかった。

そういった日々を送っていたが、やがて大きな戦争が起きた。
魔導大戦（マジェスティックスタンド）と呼ばれる戦いの中で、私は一つの小隊を任された。
任務は制圧した土地の防衛、楽な任務だと思ったが、その日の夜に謎の大部隊と戦闘となった。
数で劣る我が部隊を逃がすために単騎で殿を務め、ＧＴＭの損傷も軽微に抑えて撤退していた。
夜間での戦闘、こちらを包囲してくるＧＴＭ、それらの対処でくたびれた私は、突如として目の前に現れた白く輝く鏡に対処できなかった。
そして私はその世界から旅立った。

1．召喚するは―――

ハルキゲニアのトリステイン王国にあるトリステイン魔法学校。
国内外の貴族の子供が多く在籍しているその学校にある広い草原で、２年生へ進級する際に行われる儀式が執り行われている。
生物を召喚する魔法『サモン・サーヴァント』を使い、召喚者の使い魔を呼び寄せ、契約を交わす儀式だ。
すでに多くの学生が自身の使い魔と契約を交わし、次に召喚される生き物が何なのかを興味深そうに見ている。
その見物客となった学生の視線に先に、今まさに召喚に挑もうとする少女がいる。
ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、この学校でも一番の有名人だ。
魔法が使えない、頭でっかちの落ちこぼれ。
【ゼロのルイズ】の蔑称で蔑まれている彼女は、召喚の儀式に挑もうとしていた。
「大丈夫、私は成功する。成功するのよ…」
自身に言い聞かせ、一度の深呼吸。

自身の周りにはすでに人はいない。
みなすでに召喚を終え、遠巻きにこちらを見ているのがわかる。
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！五つの力を司るペンタゴン！我の運命に従いし使い魔を召喚せよ！」
呪文を唱えた。
いつもなら魔法を唱えた瞬間に爆発する形で失敗するが、今回は爆発音はおろか、煙すら起こらない。
やがて銀の鏡が現れた。
今まで召喚されてきた時に見た銀の鏡より、遥かに巨大な鏡がルイズの眼前に現れたのだ。
「え…きゃッ！」
２０メイルを超える鏡は、出現したと同時に巨大な人型の何かを吐きだすのを見た。
とてつもない轟音を響かせて飛び出たそれは、ルイズを飛び越え疾走し、４００メイルほど遠くで急停止した。
――それは巨人だ。
――異形の巨人だ。
２０メイルを軽く超える巨体、黒く染まった骨しかないように見える全身、ひときわ

大きい手とその甲から飛び出る３本の白い角。
その手には鋼鉄製だろうか、一本の剣が握られている。
立ち止った巨人は、観察するように辺りを見回し、やがて茫然と立ち尽くす私たちに気が付いたようだった。
一歩、また一歩と長い歩幅が４００メイルの距離を走破していく。
それを見ていた同級生たちも一歩、また一歩と後ろへ下がって行く。
恐慌状態になって散り散りに逃げ出さないのが奇跡だろう。
そして、それを呼びだしたルイズは茫然とその場に立ち尽くしていた。
かの巨人から発せられる轟音が耳を責め立てているのがわかるが、それでも予想外の存在から来る驚愕から抜け出せなかった。
やがてルイズから５０メイルの距離を空け立ち止った巨人はゆっくりと跪く。
立ち直った立会人の教師、ジャン・コルベールが、慌ててルイズの前へ庇うように躍り出る。
いつのまにか耳をつんざく轟音は小さくなり、ヒュンヒュンという音となった。
そして巨人の胸部から、人が現れた。
おおよそ０サントはある身長を持った、美しい女性だ。
水晶細工にも例えられるだろうその綺麗な顔立ちは、氷のように鋭い眼をこちらに向

けていた。
「――そなたらに聞く！ここはいずこか!?
我はフィルモア帝国、カンプ・ノイエシルチス所属、リリーマ・フォン・トラスなり！
言葉が通じるなら返答されたし！」
巨人の胸部から現れた女性は、雪山から吹き下ろす風ようなよく通る声で疑問の返答を求めた。
ルイズはハッとして声を出そうとするも、その前に彼女を守るように背を向けるコルベールが声を上げた。
「こちらはトリステイン王国、トリステイン魔法学校であります！」
「……真であろうな!?」
「本当の事です……！杖に誓っても！」
コルベールは焦っていた。
あの女性を一目見ただけで、自身では到底太刀打ちできない存在であると予期したからだ。
ここで彼女を怒らせてはならないと、誠実に言葉を交わすしかないと理解した。
さもなくば後ろにいる学生たちにも危害が及ぶ可能性があるのだから。

「当てはまる国名、地名、いずれも無しか…仕方ない…」
かすかにそう彼女、リリーマが呟くのを、ルイズの耳が捉えた。
そしてリリーマがその場から跳躍し、地面に降り立った。
腰にはあの巨人と同一の形状をした剣を佩びている。
「少し話がしたい。いいだろうか」
「…その前に、後ろの学生たちを学校へ帰しておきたいのですが……よろしいですか？」
そうコルベールは問いかけると、彼女はかまわないと了承した。
即座にコルベールはもう一人の立会人の教師、シュヴルーズへ学生の引率を頼む。
やがて彼女に率いられた学生たちは、自身の使い魔と共に学校への帰路へついた。
コルベールとルイズを残して。
巨人から鳴り響いていた轟音はいつのまにかかき消えていた。
「さて、今一度自己紹介を。
私はフィルモア帝国、カンプ・ノイエシルチス所属、リリーマ・フォン・トラスです。」
「私はトリスティン王国、トリスティン魔法学校で教師をやっております。
ジャン・コルベールと申します。
こちらの学生は貴方を召喚してしまったルイズです。」
そう言ってコルベールは横へ動き、自身の後ろに隠していたルイズを露わにする。

オロオロとコルベールの後ろを見ていたルイズは少し驚き、しかし一歩前に出て自己紹介をする。
「え、あ…！る、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。」
一例すると一歩後ろへ下がり、コルベールもルイズを半分さえぎる形で彼女を隠す。
ただの自己紹介だというのに、ルイズは冷や汗が止まらなかった。
彼女から発せられる威圧感を感じ、恐怖したのだ。
「ふむ、ではいくつか質問がしたい。よろしいか？」
「ええ、ええ、いきなり呼びだされたのですから当たり前でしょうな。どうぞ。」
そしてコルベールが主導となって話し合いが開始された。

2．使い魔とするなら―――

「まず聞きたいことはミノグシア大陸、ミノグシア連合、聖宮ラーン、この地名、国名に聞き覚えはあるか？」

彼女から問われた地名はルイズもコルベールも初めて聞くものだった。

ゆえにコルベールは即座に返答する。

「いえ、どれも聞いたことの無い名前です」

「……ではジョーカー太陽星団、惑星デルタ・ベルン、惑星アドラー、惑星ボォス、これらに聞き覚えは？」

「…いえ、聞いたことはありません。

それと申し訳ないのですが、一つお聞きしたいことが…太陽星団とは？惑星とはなんです？」

そうコルベールが問い返すと、彼女は端麗な顔をゆがめた。

「太陽星団を、惑星を知らない…？この星の事だぞ…？」

「星って、あの夜に光る星の事よ…ね…？」

ルイズはポロリとそうつぶやくと、彼女は苦虫をかみつぶしたような顔になった。

「……この大地は平坦か？それとも丸いか？」
「へ、平坦であると思われておりますが…」
彼女は空を見上げ、頭を抱えた。
「あの、大丈夫ですか…？」
「ああ、すまない。少々現実とは思えなくてな…」
そう彼女は頭を軽く横へ振り、再び問い始めた。
「では、召喚と言ったな？彼女が私たちを呼びだした、と」
「はい、先ほどまで学生による使い魔召喚と契約の儀式が行われておりまして、このルイズがあの巨人と貴女を呼び出しました」
「そうか、召喚されるモノは召喚者の任意で選ばれるか？それとも無作為に召喚される者が決まるのか？」
「召喚されるモノは魔法そのものによって選ばれますので、無作為となるでしょうな」
「つまり私たちが出てきたのは貴方がたの意思ではない、と？」
「ええ、そうなります。」
コルベールが答えると、今まで感じていた威圧感が嘘のように消えた。
「すまない、こちらは先ほどまで戦闘状態であったのだ。
みなを怯えさせてしまった」

許してほしい、そう彼女は謝罪し、頭を下げる。
コルベールはほっと胸をなでおろし、一先ずの危険は去ったのだと思った。
「いえ、わざとではないにしても、無関係な貴女を連れ去ったのです。
こちらも申し訳ないことをした」
「私も、呼びだしてごめんなさい」
ルイズとコルベールは謝罪する。
本来なら高飛車な性格をしているルイズではあるが、目の前の彼女から発せられた威圧感と、それらから自身をかばってくれたコルベールが謝罪をしているのを見て、自身も謝らないといけないのだと思ったのだ。
「謝罪は不要だ。これは事故のようなものなのだから」
「しかし…」
「それよりも、使い魔の召喚と契約の儀式と言ったな？
契約とは、使い魔とはどういったものか、説明をしてくれ」
彼女はあえてコルベールの言葉をさえぎり、別の事を話し合うように促した。
コルベールは少し頬笑んだ。
「…そうですね、ありがとうございます。
契約は召喚者と召喚されたモノがキスをすることで交わされるもので、契約が成され

るとルーンが刻まれます。
　ルーンは特殊な能力を持っており、例えば言葉を話せない動物が喋れるようになったりといった能力を付与します。
　使い魔は、主に契約者の身を守ったり、役に立つことをするのが仕事です」
「なるほど…使い魔契約は解除できるのか…？」
「それは…申し訳ありませんが、現状は使い魔か契約者が死亡することで契約が切れることがあるのみです。」
「解除はできないと？」
「はい、なにぶん人間が召喚される事例が今までありませんでしたので…」
　そう聞くと彼女は眉をひそめた。
「では、元いた場所へ戻すことは…？」
「すみません。呼びだしたモノを帰す魔法はないのです」
「そうか…」
　彼女は少し顔をうつむき、考え込む。
「本当に申し訳ありません」
「先も言ったが、貴方らが謝る必要は何一つとして無い。
　こちらも戦闘後とはいえ、確認を怠っていた。

あれを回避しようと思えばできていたのだ。
これこそ当方の責任である。
それに、貴方からは誠実に対応していただいた。
逆に礼を言いたい」
「いえ、お力になれず申し訳ない。
では、これからどうなされますか?」
「これから、か…このままルイズと使い魔契約を結ばずにいるとどうなる?」
そう彼女は聞くと、ルイズはあっ、と声を上げた。
あの威圧感を出せる彼女を無理矢理使い魔にするなど、まだ人生経験の浅いルイズには無理な話だろう。
「そうですね…ルイズは座学は非常に優秀なのですが、実技となると失敗が多いのです。
その点で蔑まれることも多いのです。
もし使い魔を得られないとなると、風当たりは更に強くなるかと…」
ルイズは話そうとする前に、コルベールがルイズの現状を話してしまった。
威圧感が無くなったとはいえ、彼女の脅威を考えれば正直に話すことが最善ではある。
しかしそういった経験の無いルイズは顔が真っ青になり、涙がこぼれそうになる。

「そうか、わかった。契約を結んでもいい」
そう聞こえるまでは。
「え…？なんで…？」
「理由はいくつかある。
一つは今後の活動の拠点が容易に得られること。
一つは魔法学校ということもあり、契約を解除する情報も得られる可能性が高いこと。
もう一つはここで恩を売っておけば、今後の役に立つ事。
もっと理由はあるが、元の世界へ帰る為だ。
ここでつながりを断つのは非効率的だ」
「な、なによそれ・・・っ！」
ルイズからしてみれば上げて落とされたといった感じだ。
完全な打算で契約を結ぶのだと言われれば、短期で癇癪持ちなルイズは容易に頭に血が上る。
思いっきり怒鳴ってやろうとした。
しかし――――
「なにより、子供を泣かせるのは嫌な気持ちになる」

その言葉が怒鳴ろうとしたルイズを押しとどめた。
そして彼女はルイズの前にしゃがみ込む。
剣を抜き、それを片手でルイズに捧げるように持つ。
「一時ではあるが、この剣を預ける。
この瞬間より我が身は剣として、貴女を守ろう」
ルイズは見惚れた。
その優雅で美しい騎士に。
だが、すぐさま気を取り直し、言葉をかける。
「あなたを私の使い魔とします。
だけど一時と言わず、永劫私に仕えたいと思わせてあげる！」
先ほどの意趣返しだろう。
そうルイズは言葉を放ち、呪文を唱える。
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！五つの力を司るペンタゴン！この者に祝福を与え！我の使い魔となせ！」

５００．語られるは――　①

太陽が少し沈みかけた時間帯、トリステイン・アルビオン双王国　トリステイン学園都市。

トリスタニアと並ぶ巨大な都市は、かつてはトリスティン魔法学院と呼ばれていた。

５００年前に起きた《１００年の変革》により、４０００年間続いてきた様々な事柄が変わらざるおえなくなった。

かつてとは違い、貴族以外でも魔法や騎士、ＧＴＭの事について学ぶ場が設けられたこの都市は、その変わらざるおえなかったものの一つである。

中央に聳える１つの塔とそれを囲む５つの塔。

６つの塔を繋ぐ五角形（ペンタゴン）の形をなす城壁。

城壁に設けられた門から伸びる、まるで蜘蛛の巣のように張り巡らされた道と、道に沿うように建てられてた大小様々な建物。

４方３リーグにも及ぶその巨大な五角形（ペンタゴン）の姿を持つ都市の北部、角の頂点に建てられた時計塔で私、ルアラン・ド・ラ・ロッタは偉大なる虚無の魔法使い、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール様から５００年前の話を聞いていた。

「――これが彼女との最初の出会いね」
ルイズ様はそう締めくくると、空に浮かばせた紅茶の入ったカップを手に取り口に含む。
宙に浮かぶルイズ様は、柔らかい安楽椅子に座っているようにリラックスしていた。
この移り変わっていく世界を見守るため、３００年前に自身で作りあげた虚無の魔法で肉体を捨てた彼女は、定期的にこうやって過去を語ることで魂の摩耗を防いでいるのだ。
「様々な形で語られている話を、実際に当事者から聞いてみると色々な驚きがありますね」
私はルイズ様の語るお話を打ちこんでいた電子書本を机の上に置き、少し背伸びをしながらそう口を開いた。
でしょうね、とほほ笑むルイズ様は、宙に浮かばせたソーサーに空になったカップを起き、軽く指をふって紅茶の入ったポッドを呼び寄せる。
そしてカップに紅茶を注ぎながらルイズ様は口を開く。
「このお話は有名だものね。市井で出回っている本には色々な脚色も多いと聞いているわ」
「はいそうです。突拍子の無いモノだとルイズ様が虚無で戦い、勝つことでリリーマ様

を使い魔としたとされている物もあります」
　その頃はまだ虚無は伝説の中のお話だというのに、そう私は苦笑しつつ手に持ったカップから紅茶を飲む。
「そうね。あの頃は今と違って虚無はただの伝説、御伽話に出てくる魔法だったわね」
「はい。系統魔法も一般市民には使えず、貴族のみが振るえるものとされているのですよね？」
「ええそうよ。５００年前は、今では常識となっていることのほとんどがなかった」
　そう懐かしそうにルイズ様は仰った。
「《１００年の変革》により様々なモノが一気に広まったのは、学校でも学ぶ常識ですからね」
「…あの頃は、激動の時代だったわ。
　東方連合軍によるロマリア連合皇国への大侵攻。
　ブリミル教の革新。エルフとの講和。
　４０００年続いてきたことが全て変わったと言っても過言じゃなかった」
「《始まりの１０年》ですね。騎士とＧＴＭが世に出たのもその頃、と」
「ええ、そこから多くの事が移り変わって行った。
　【変異】の魔法が公開され、多くの貴族が騎士となっていったのも。

【錬金】の魔法が作りかえられ、【錬金術】となったのも。
《１００年の変革》の根底を支えた、全ての技術が出そろった。
ゆえに《始まりの１０年》と呼ばれているのでしょうね」
「【変異】も【錬金術】も、どっちも今の世界を支えている魔法です」
もし【変異】の魔法が無ければ騎士という存在は現代に定着せず、【錬金術】が作られなければＧＴＭの生産は不可能だ。
この二つの魔法はまさしく、世界を変えた魔法と言える。
そう考えていた私に、ルイズ様は意地悪そうな笑顔でこう仰った。
「世界を支える、そういう意味では虚無の魔法は役立たずよね」
「え、いえ、そんなことは…」
冗談よ、とルイズ様は頬笑んだ。
「では、そろそろ続きを始めましょう」
でなきゃ日が暮れちゃうわ。とルイズ様は呟いた。
「あ、はい。お願いします。」
そう私は答えて、机の上に置いていた電子書本を手に取る。
「そうね…彼女が召喚された次の日の事よ――――」